

第2次世界大戦後におけるオーストラリアの 中等教育と高等教育

野邊 政雄

メルボルンのグレン・アイラ市に住む高齢女性に2005年と2006年に聞き取り調査をおこない、彼女たちの語りを既に『研究集録』に発表した。その語りを理解することの助けとなるように、1945年から1980年頃までのオーストラリアの中等教育と高等教育について要約する。

Keywords: オーストラリア, 中等教育, 高等教育, 女性

1 本稿の目的

筆者は2005年と2006年にメルボルンで65歳以上80歳未満の高齢女性にライフヒストリーについての聞き取り調査を実施した。テープ起こしをして彼女たちの語りを文章化し、分析を始めた。この分析をおこなっていく中で、彼女たちのライフヒストリーを理解するためには、彼女たちが10代であった当時、オーストラリアの教育はどうであったかを知っておかねばならないことに気づいた。そこで、筆者はオーストラリアの教育に関するテキストを読むとともに、それに関する統計を収集した。本稿の目的は、1945年から1980年頃までのオーストラリアの中等教育と高等教育について要約することである。

2 中等教育

中等教育の前期が日本の中学校、後期が高校に相当する。1943年に、タスマニア州は義務教育を終える年齢を16歳、ニュー・サウス・ウェールズ州は15歳とした。その他の州はその年齢を1960年代に15歳とした。1945年以降、オーストラリアの教育制度は急速に整備されていった。しかしながら、1970年頃までは、義務教育を終えてからも中等教育機関に在学し続ける生徒はそれほど多くなかった。例えば、1948年には中等教育の最終学年（通例5年）まで進むのは約10%にすぎなかった。1960年代に中等教育の修業年限が1年増えたが、中等教育の最終学

年まで進む生徒の割合は増加していった。それでも、1969年には、その割合は28%にすぎなかった（Crittenden 1989: 71）。

オーストラリアでは、公立学校の中等教育を担う割合が大きい。1970年に中等教育機関の生徒のうち、78%が公立学校に、17%がカトリック系の私立学校に、5%がそれ以外の私立学校（英国国教会系の私立学校など）で学んでいた。17歳以上の中等教育機関の生徒（義務教育ではない生徒である）に限ると、カトリック系以外の私立学校に在学する生徒の割合が相対的に大きくなる。中等教育機関に在学する17歳以上の男子生徒のうち、70%が公立学校に、17%がカトリック系の私立学校に、13%がそれ以外の私立学校に通学していた。17歳以上である女子生徒のそれぞれの割合は、67%、17%、16%であった（Encel 1974: 177-8）。

まず、1950年代と1960年代に、中等教育がどのように普及していったかを跡づけたい。オーストラリアでは、学制や義務教育の期間が州によって違っている。また、同じ学年を再度履修する生徒もいる。それゆえ、学年が高くなるにつれて、どのくらいの割合の男子と女子が学校をやめないで中等教育機関に在学し続けているかを学年ごとに見てゆくことはあまり意味がない。そこで、すべての若者のうち中等教育機関に在学している若者の割合を年齢ごとに見てゆくことにする。ところで、中等教育機関には

公立学校と私立学校があるが、義務教育後に在学する生徒の割合で両者の間に差がある。このため、中等教育機関を公立学校と私立学校に分けて、年齢ごとに中等教育機関に在学している男子と女子の割合

を見てゆく。

表1は公立学校に通う男子生徒、表2は私立学校に通う男子生徒、表3は公立学校に通う女子生徒、表4は私立学校に通う女子生徒についてのデータを

表1 公立学校の男子生徒の在学率（1950年代と1960年代）

(単位: %)

年齢	出生年									
	1944年	1945年	1946年	1947年	1948年	1949年	1950年	1951年	1952年	
	生徒が12歳のときの年									
	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年	
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	99	99	100	100	100	100	100	100	100	101
14歳	88	88	90	92	92	93	96	98	100	
15歳	56	58	63	67	69	69	72	76	79	
16歳	28	31	35	37	39	42	44	46	51	
17歳	12	14	16	17	18	19	24	26	28	
18歳+	7	6	6	6	6	9	10	11	11	
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	
生徒が18歳のときの年										

(出典) Encel *et al.* (1974: 178)。

表2 私立学校の男子生徒の在学率（1950年代と1960年代）

(単位: %)

年齢	出生年									
	1944年	1945年	1946年	1947年	1948年	1949年	1950年	1951年	1952年	
	生徒が12歳のときの年									
	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年	
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	100	102	100	100	100	99	98	99	93	
14歳	92	95	93	95	93	93	93	93	94	
15歳	74	76	75	77	77	79	81	83	84	
16歳	52	53	54	56	58	60	63	64	66	
17歳	n.a.	32	33	35	37	35	42	43	45	
18歳+	11	12	15	14	14	16	17	17	17	
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	
生徒が18歳のときの年										

(出典) Encel *et al.* (1974: 178)。

表3 公立学校の女子生徒の在学率（1950年代と1960年代）

(単位: %)

年齢	出生年									
	1944年	1945年	1946年	1947年	1948年	1949年	1950年	1951年	1952年	
	生徒が12歳のときの年									
	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年	
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	99	98	99	99	98	99	99	99	100	
14歳	83	84	85	87	88	90	93	96	99	
15歳	46	49	52	56	58	61	65	69	75	
16歳	21	22	25	27	30	32	35	39	44	
17歳	7	8	10	11	12	12	16	18	21	
18歳+	2	2	2	2	3	4	5	5	6	
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	
生徒が18歳のときの年										

(出典) Encel *et al.* (1974: 179)。

表4 私立学校の女子生徒の在学率（1950年代と1960年代）

(単位: %)

年齢	出生年									
	1944年	1945年	1946年	1947年	1948年	1949年	1950年	1951年	1952年	
	生徒が12歳のときの年									
	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年	
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	103	104	103	102	103	103	103	102	101	
14歳	93	95	95	95	96	96	98	97	97	
15歳	69	70	71	72	74	74	81	80	84	
16歳	41	42	44	46	48	51	54	56	58	
17歳	n.a.	18	19	21	22	21	28	30	31	
18歳+	3	4	5	5	4	6	6	7	7	
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	
生徒が18歳のときの年										

(出典) Encel *et al.* (1974: 179)。

示している。表1にある1944年生まれの男子生徒を例にしてこれらの表の見方を説明しておきたい。1956年に12歳となる男子生徒のうちで、公立学校に在学する男子生徒の合計を基準にしており、その年の生徒数を100としている。そして、年齢が上がるにつれて、公立学校に在学する1944年生まれの男子生徒数が12歳のときの男子生徒数と比べてどのように変化したかを示している。

メルボルンでの聞き取り調査の調査対象者となったのは、1926年生まれから1941年生まれまでの女性である。そこで、表1から表4における1944年生まれの生徒が在学する割合を見ることで、最も若い調査対象者は中等教育機関での在学状況がどうかを推測できる¹⁾。しかし、1944年生まれの生徒では、17歳のとき私立学校に在学する人数の割合に関するデータが欠けている。そこで、代わりに、1945年生まれの生徒を見てゆきたい。表1から表4にある1945年生まれの生徒のデータから、次の2点を読み取ることができる。

第1に、男性でも女性でも、17歳まで中等教育機関に在学する生徒の割合はそれほど高くないが、17歳まで在学する生徒の割合は女性よりも男性のほうが高いことである。そして、男性でも女性でも、17歳まで在学する生徒の割合は公立学校よりも私立学校のほうが高いことである。数値をあげれば、公立学校の男子生徒で17歳まで在学するのは14%であり、私立学校の男子生徒で32%である。これに対し、公立学校の女子生徒で17歳まで在学するのは8%であり、私立学校の女子生徒で18%である。

1960年代初頭、義務教育終了後も中等教育機関に在学する女性の割合は男性のそれよりも低かったが、これは次のような理由からである。男性の場合、学校教育を受けることは将来においてよい職業に就業することに繋がる。ところが、1950年代には、女性は若くして結婚し、結婚後は退職して専業主婦となることが一般的であった。さらに、女性は専門的な職業に就業する機会が限られていた。こうした事情から、両親は（義務教育を終えた後）中等教育機関の高学年まで娘を学校に通わせるのに熱心でなかったのである(Encel 1974: 176)。1960年代に入ってからそうした制度や価値観は変化し始めたが、1960年代初頭では1950年代とそれほど違いがなかったのである。

第2に、中等教育機関に在学し続ける生徒の割合が50%を切るのは、16歳前後であることである。数値を示せば、その割合が50%未満となるのは、公立学校に通う男子生徒で16歳から、私立学校に通う男子生徒で17歳から、公立学校に通う女子生徒で15歳

から、私立学校に通う女子生徒で16歳からである。性別や学校が公立か私立かで若干の差があったが、1945年生まれの人は多くが16歳くらいで中等教育機関をやめていたのである。

その後、中等教育機関の高学年に在学し続ける生徒の割合は増加していったが、その割合の増加は1960年代後半に顕著である。このことを、表1に示した公立学校の男子学生が17歳のときに在学する割合で例示したい。その割合は1944年生まれの男子学生で12%（1961年に該当する）、1948年生まれの男子学生で18%（1965年に該当する）、1952年生まれの男子学生で28%（1969年に該当する）である。在学する生徒の割合は1960年代にかけて一貫して高くなっているが、その後半にとりわけ上昇している。中等教育機関の高学年に在学する生徒の割合が増加する傾向は、私立学校の男子生徒（表2を参照）、公立学校の女子生徒（表3を参照）、私立学校の女子生徒（表4を参照）でも見られる。

1960年代にわたって在学する生徒の割合が増加した。その結果、中等教育機関に在学する生徒の割合が1960年代終わりにどうなったかは、表1から表4にある1952年に生まれた生徒のデータを見ることから分かる。このデータから、次の2点を読み取ることができる。

第1に、17歳まで在学する生徒の割合は女性よりも男性のほうが高く、17歳まで在学する生徒の割合は公立学校よりも私立学校のほうが高いことである。この傾向は1945年生まれの生徒に見られたが、その後もずっと続いているのである。1952年生まれの生徒の数値をあげれば、公立学校の男子生徒で17歳まで在学するのは28%であり、私立学校の男子生徒で45%である。これに対し、公立学校の女子生徒で17歳まで在学するのは21%であり、私立学校の女子生徒で31%である。

第2に、中等教育機関に在学する生徒の割合が50%を切るのが、17歳前後となったことである。数値を示せば、その割合が50%未満となるのは、公立学校に通う男子生徒で17歳から、私立学校に通う男子生徒で17歳から、公立学校に通う女子生徒で16歳から、私立学校に通う女子生徒で17歳からである。性別や学校が公立か私立かで若干の差があったが、1952年生まれの人は多くが17歳くらいで中等教育機関をやめるようになった。

次に、1970年代に中等教育機関に在学する生徒の割合がどのように変化したかについて見てゆきたい。このために、1953年から1963年に生まれた若者について、年齢ごとに中等教育機関に在学している若者の割合をまとめ、表5から表8に示す。表5は

表5 公立学校の男子生徒の在学率（1970年代）

（単位：％）

年齢	出生年										
	1953年	1954年	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年
	生徒が12歳のときの年										
	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	100	102	101	101	101	101	100	100	100	100	99
14歳	101	102	101	101	101	101	10	99	99	100	98
15歳	81	82	82	83	84	82	81	84	85	86	86
16歳	53	54	55	56	54	52	54	56	55	56	54
17歳	29	30	31	29	27	28	28	27	27	26	23
18歳+	11	12	11	9	9	9	9	9	8	7	7
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年	1981年
生徒が18歳のときの年											

（出典）Commonwealth Bureau of Statistics (Australian Bureau of Statistics), Social Statistics: Australia. Schools, 1965-1981.にもとづいて著者作成。

表6 私立学校の男子生徒の在学率（1970年代）

（単位：％）

年齢	出生年										
	1953年	1954年	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年
	生徒が12歳のときの年										
	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	98	98	98	98	98	98	98	101	101	101	99
14歳	94	94	94	96	97	97	96	99	96	100	99
15歳	85	85	87	89	90	90	90	93	94	93	95
16歳	66	66	67	69	71	70	71	73	72	73	75
17歳	46	46	47	48	49	48	48	49	48	49	48
18歳+	15	16	14	14	13	12	11	11	11	9	8
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年	1981年
生徒が18歳のときの年											

（出典）Commonwealth Bureau of Statistics (Australian Bureau of Statistics), Social Statistics: Australia. Schools, 1965-1981.にもとづいて著者作成。

表7 公立学校の女子生徒の在学率（1970年代）

（単位：％）

年齢	出生年										
	1953年	1954年	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年
	生徒が12歳のときの年										
	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	99	102	100	101	101	101	100	100	100	100	99
14歳	99	101	100	100	100	100	99	98	99	99	98
15歳	76	77	78	79	80	79	80	82	84	85	85
16歳	44	46	47	49	50	49	52	55	56	57	56
17歳	22	23	24	25	25	26	28	29	30	30	27
18歳+	6	6	6	6	7	7	8	8	8	8	7
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年	1981年
生徒が18歳のときの年											

（出典）Commonwealth Bureau of Statistics (Australian Bureau of Statistics), Social Statistics: Australia. Schools, 1965-1981.にもとづいて著者作成。

表8 私立学校の女子生徒の在学率（1970年代）

（単位：％）

年齢	出生年										
	1953年	1954年	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年
	生徒が12歳のときの年										
	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年
12歳	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13歳	100	102	100	99	100	100	99	99	101	102	102
14歳	97	97	97	97	98	98	97	99	99	99	102
15歳	84	85	86	87	89	89	90	91	92	93	97
16歳	57	59	60	61	63	64	68	70	71	74	76
17歳	33	34	35	37	40	41	43	45	47	47	47
18歳+	7	8	7	8	8	8	8	8	9	7	7
	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年	1981年
生徒が18歳のときの年											

（出典）Commonwealth Bureau of Statistics (Australian Bureau of Statistics), Social Statistics: Australia. Schools, 1965-1981.にもとづいて著者作成。

公立学校に通う男子生徒、表6は私立学校に通う男子生徒、表7は公立学校に通う女子生徒、表8は私立学校に通う女子生徒についてのデータを示している。これらの表においても、12歳のときの生徒数を基準にしており、その年の生徒数を100としている。そして、年齢が上がるにつれて、生徒数が12歳のときの生徒数と比べてどのように変化したかを示している。表5から表8までを見ることから、次のことが分かる。

第1に、男子生徒が中等教育機関の高学年に在学する割合は1970年代にあまり変化していないことである。例えば、公立学校に16歳まで在学する男子生徒の割合は、1953年生まれで53%であり、1975年生まれで54%である。その割合は1%増加したにすぎない。公立学校に17歳まで在学する男子生徒の割合は、逆に減少している。つまり、その割合は1953年生まれで29%であり、1962年生まれで23%である。

第2に、女子生徒が中等教育機関の高学年に在学する割合は1970年代に顕著に増加したことである。数値をあげれば、公立学校に16歳まで在学する女子生徒の割合は、1953年生まれで44%であり、1975年生まれで56%である。そして、公立学校に17歳まで在学する女子生徒の割合は、1953年生まれで22%であり、1975年生まれで27%である。私立学校の女子生徒では、その増加は更に顕著である。私立学校に16歳まで在学する女子生徒の割合は1953年生まれで57%であったが、1975年生まれでは76%となった。私立学校に17歳まで在学する女子生徒の割合は1953年生まれで33%であったが、1975年生まれで47%である。

1970年代に中等教育機関の高学年に在学する女子生徒の割合が顕著に高くなっていった。特筆に値するのは、1977年から義務教育後に中等教育機関で学ぶ生徒の割合は男子よりも女子が高くなったことである。すなわち、その年から16歳と17歳の若者のうち中等教育機関（公立学校および私立学校）に在学する若者の割合は男性よりも女性のほうが高くなった。数値をあげると、1961年生まれの若者が16歳のとき（1977年に当たる）中等教育機関に在学する割合は、男性で59%であり、女性で60%である。また、1960年生まれの若者が17歳のとき（1977年に当たる）中等教育機関に在学する割合は、男性で32%であり、女性で33%である。

3 高等教育

第2次世界大戦前、オーストラリアには大学は6つしかなかった。1945年に7番目の大学が設立されたが、その年に7つの大学に登録した学生は26,000

表9 大学における女性の割合

	新入生	すべての学生	卒業生
1956年	26.8	22.1	20.0
1961年	28.4	23.3	21.6
1966年	32.2	27.4	25.3
1971年	36.1	31.5	28.6

(出典)Encel *et al.* (1974: 192)。

人にすぎなかった。1970年には大学の数は15となり、大学に登録する学生は116000人となった。1978年には大学は19校まで増え、大学に登録する学生は160,000人となった (Crittenden 1989: 72)。

1918年から1950年まで6つの大学で学んだ学生の約20%は女性であったと推測されているように (Encel *et al.* 1974: 192)、大学で学ぶ女子学生は少なかった²⁾。1950年代から、新入生、登録学生、卒業生に占める女子学生の割合が徐々に高くなっていった (表9を参照)。そして、1971年には登録する学生の31.5%が女子学生となった。ドーソン (Dawson 1965: 228-30) も、かつてはシドニー大学で女子学生が少なかったことを明らかにしている。その研究によると、同大学から1881年から1959年までの間に学位を取得した人のうち、学士号取得者の22.6%、修士号取得者の17.5%、博士号取得者の5.9%が女性であった。

1968年に、高等教育カレッジ (college of advanced education) と呼ばれる新しい高等教育機関が設立された。そこでの教育は、職業教育に力点が置かれていた。登録する学生数は、1971年に70,550人、1975年に125,383人であった。高等教育カレッジの学生に占める女子学生の割合は、1971年に20%であった。大学と高等教育カレッジ以外に、高等教育機関として、教員養成大学 (Teachers' College) があった。そこで学ぶ学生には女子学生が圧倒的に多かった。1970年頃には、その学生の約70%が女子学生であった。そして、大学、高等教育カレッジ、教員養成大学といった高等教育機関で学ぶ学生全体のうちでは、女子学生は1971年に34%を占めていた。

ちなみに、1987年から大学は高等教育カレッジや専門学校と合併したり、大学以外の高等教育機関が大学に昇格したりした。その結果、オーストラリアでは大学の数がとても多くなった (マッケンジー 1992: 30-5)。

(注)

- 1) 表1から表8は Social Statistics, Australia. No.1 Schools に掲載されているデータから作成されている。この統計書は1960年から発行されており、1943年生まれ以前の生徒のデータは

入手できなかった。

- 2) 第2次世界大戦中に連邦政府は文部省を設立し、大学についての統計を組織的に収集するようになった。このため、それ以前の大学に関する統計はあまりない。

(引用文献)

Crittenden, Brian, 1989, "Education in Australia: conformity and Diversity," Keith Hancock ed., *Australian Society*, Cambridge: Cambridge

University Press, 70-93.

Dawson, Madge, 1965, *Graduate and Married*, Department of Adult Education, University of Sydney.

Encel, S., N. MacKenzie, and M. Tebbutt, 1974, *Women and Society: An Australian Study*, Melbourne: Cheshire Publishing Pty Ltd.

マッケンジー, コリン, 1992, 「オーストラリアの教育現状について」『書齋の窓』有斐閣, 30-5.